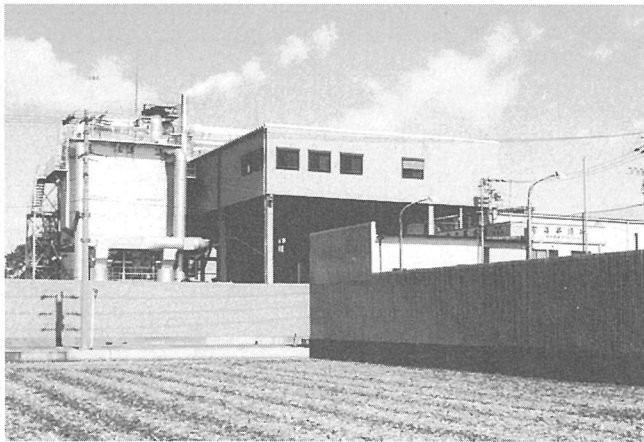


企業訪問 循環型最前線レポート

(有)海部清掃

再資源化施設へ 再資源化を軸に見せる施設づくりを



選別ヤード700坪を建設。 焼却炉2基も完成

循環型社会へ向けて、産業廃棄物処理業界は大きな変換時を迎えています。3Rへの取組み、適正処理の推進を背景に、特に中間処理施設の変化は目を見張るものがあります。再資源化、減容化は時代の要請でもあります。

(有)海部清掃は昨年1月、既存の焼却炉を一掃し、ダイオキシン類特別措置法に基づいた14年対応の焼却炉を2基建設し、新しい中間処理施設として生まれ変わりました。既存の焼却炉1基の体制から新たな選別ヤードを充実確保するために施設隣の土地約700坪を購入し建設。徹底した選別体制を整え、焼却による減容化でなく再資源化を徹底的に行い、最終的に残った廃棄物だけを

焼却する循環型リサイクルを中心に中間処理体制を整えています。現在は収集運搬、選別、焼却の三つの事業を軸に産業廃棄物、特別管理産業廃棄物、一般廃棄物の処理を行っています。

2基の焼却炉はバッチ式で管理、操作はコントロールセンターで行い、トラックからそのままクレーンで投入口へ投入。炉の温度等すべてがコンピューターで制御され、コントロールセンターで監視されています。能力は1日4.7t、8時間稼動しています。バグフィルター、冷却装置など最新の設備で安全性を確保しています。

選別も焼却もその日のうちに処理

同社の作業特徴は、ストックヤードに廃棄物を残さない徹底した作業管理がされています。収集した廃棄物は一度ストックヤードに降ろされ人手により手際よく選別されます。選別は紙くず、廃プラスチック類、ビン・缶・ガラスくず、金属くず、コンクリート殻、アスファルト等は全て選別コンテナに分けられ、再資源化の原料としてリサイクル業者に引き渡されます。最終的に残ったものだけを再びトラックに積み、道をはさんだ焼却施設に運び、トラック荷台からそのままクレーン操作により投入口に運ばれ焼却炉に入り焼却処分されます。焼却灰はアセックに運ばれ埋立処分されます。

感染性医療廃棄物はそのまま焼却施設に運ばれ、人の



手に触れることなく焼却処分されます。敷地は全体で5000m² (1500坪) で、最近、焼却施設に隣接した土地を購入し、スペースを拡張しました。ストックヤードには選別されたリサイクル資源以外すべてその日のうちに処分する体制のため、臭いや飛散の心配がなく常にきれいに整理された状態です。

隣近所付き合いが原点

創業から“隣近所との付き合いを大切に”してきた同社は昭和52年に創業。当初はゴミ屋からのスタートでした。きつい仕事で偏見もあったが社長の加藤豊氏は焼却施設の建設にあたって住民の方に説明会を開き、施設の内容や管理面についても十二分に話し合い、反対の方の意見も聞き、理解していただきました。さらに同社の方針として建設後住民の方が納得できなければ施設を壊すとまで約束したそうです。周囲は畑ばかりでしたから農家の人達と話し合うなど付き合いをマメにしてきたといいます。今でもその付き合いは変わっていません。「ゴミ屋でしたから、特に周辺には迷惑をかけないように細心の注意をはらってきました。収穫期には農家の人が大根や白菜など畑でとれた野菜を持ってきてくれました。また、反対に耕運機がこわれたので修理して欲しい、リヤカーを直して欲しいなどいろいろなお手伝いもしました。」と当時のエピソードを話していただきました。

完成後、反対の人は誰一人いませんでした。社長自ら現場主義に徹し、現場のことは誰よりも理解していた人でその事が周辺住民の方により理解されたのではないかと思います。住民説明会にもまず人間的なつながりが重要であることが分かります。

循環型再資源化施設へ

施設はグリーンに統一され、周辺はもとより敷地内も常

にキレイに整理され、臭いやゴミが散乱するといった光景は一切ありません。

社員30名は全て正社員で、アルバイトは一切使っていません。収集や選別、破碎作業は経験を積んだ社員だから重要性が判り、効率や安全性を高め、追求することが可能で、社員教育にも表れています。

30m³、40m³の収集運搬車両が県外から多く、その他地元4市(稲沢市、津島市、一宮市、春日井市)と11町(甚目寺町、新川町、西春町、大治町、七宝町、美和町、蟹江町、弥富町、佐屋町、佐織町、平和町)の一般廃棄物収集運搬業務を行い地元の環境保全に積極的に取組んでいます。今後はリサイクル事業の強化、焼却炉を生かしたサーマル発電も視野に入れているとのこと。

同施設にはこのほかカンの圧縮設備をはじめ発泡スチロールの減容固化設備、ペットボトルの粉碎設備もあり、缶の圧縮についてはアルミ、スチール缶を選別後、圧縮して減容化しています。発泡スチロール、ペットボトルのリサイクル事業では採算面を考え、時期がきたら取り組んでいきたいとのことでした。産業廃棄物処理業者はそれぞれにスキルアップを図り、確実に変わってきています。

